

---

# 聖華高校？ ああ、あの変人の巣窟ね

黒夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖華高校？ ああ、あの変人の巣窟ね

### 【Nコード】

N7289T

### 【作者名】

黒夢

### 【あらすじ】

私立聖華高校。国内でも有名な進学校である其処に通う生徒は一癖も二癖もある変わり者ばかり。

ハーレム、熱血、主人公補正、チート、殺し愛、残念な天才、倒錯した愛憎etc……様々な属性を持つ無自覚な変人達は周囲を巻き込みながら、今日も今日とて八チャメチャな日常を謳歌する。

## ただの脇役に過ぎない俺（前書き）

本作は特定の主人公が存在しない短編連作方式を採用しています。世界観と設定は共有していますが、話ごとに登場するキャラクターは変わり、他の話では主人公だったキャラクターがサブに回ることもあります。

ただの脇役に過ぎない俺

雲一つ見当たらない青空。

気持ちの良い日差しは麗らかな春の訪れを祝福しているかのようだ。

これなら、オレの胸中に満ちる憂鬱な雨雲すらも掻き消すのは無理か。の

暴風雨と化して荒れ狂う超弩級の積乱雲は、一つの都市を壊滅させる勢力だ。

たかだか絶好のデート日和に過ぎない日差しでは、とても地表にまで届かない。

むしろ余計にオレのハートに影を差す。

「心境は？」

不意に。オレの背後に人の気配。

不躰ながらもどこか労りが感じられるその声は、この聖華高校で一番の親友である人物のもの。だからこそ、こっちも隠さずに吐き出せる。

「涙で前が見えねえよ」

「そつやって男は真の漢に近づくんだけ」

よっこらしょっと、若い身空でジジ臭くオレの隣に座る親友。

こうしてオレのイジケ部屋ならぬ屋上の隅に良き理解者が現れた。

「毎度毎度の事ながら、迷惑掛けてすまねえな。今度なにか奢らせ  
てくれ」

「いや、別にいいって。んな事より……またなのか？」

最早口を動かす事すら億劫になっているオレは無言で頷いた。

おい。気遣ってくれるのは嬉しいけどさ、その憐れみの眼差  
しは止めてくれない？

惨めになって死にたくなるから。

親友はリストラを告げる上司のような優しさでオレの肩をポンッ  
と軽く叩く。

そうして半ば、というか全面的に呆れた面持ちで言う。

「なあ、如月。六回も繰り返せばいい加減わかっただろう？  
お前が好きになった奴に全力でぶつかってるのはよく知ってる。  
けどな、好きになりすぎるってーのもやっぱり問題なんだよ。最  
初から精一杯好きにならないで、告白が成功してから少しずつ歩み  
寄った方がいいと思うんだ」

「……半端な気持ちで告白するなんざ、相手に対して失礼だろ」

「その結果、屋上の隅でイジケる事になってもか？」

「……………ああ」

少しだけハートがグラツと揺れ動くけど、やっぱり其処は譲れない一線だと思う。

「と言うか親友よ。」

お前はオレが告白に敗れたらいつも此処に来ると思っているのか？」

「少なくとも、今まではそうだっただろう？」

「……………」

確かに。告白に敗れた後は晴れの日も風の日も雨の日もオレはここにいた。

特に雨の日。コイツが無言で傘を差し出してきた時は雨粒に紛れて涙を流したね。

思えば、オレの中でコイツが友達から親友にランクアップした瞬間である。

「はあ………… お前とは小学校からの長い付き合いだが、良い奴だと思っよ、本当に。」

ただな、もう少し融通を利かせろよ。口にこそ出さないけどな、今井とか安原とか君ヶ代とか、けっこう俺以外にも心配してる奴いるんだぜ？」

え？ そうなののか？

そういえば告白の翌日はみんなヤケに優しくかったような…………。

くっ！ 恋人には恵まれないオレも、友人には恵まれてるんだな。って、あれ？ でもそれってオレの告白が周知の事実って事なんじゃないか？

そこんどこどうなのよ、親友さん。

「……そりゃ、相手が相手だからな。  
ちよつと内情を知ってる奴ならすぐに気づくさ」

言いながら、親友はどこか遠い場所でも見るかのように青空を見上げる。

なんだ。いきなり黄昏やがって。変な奴だな。オレも人の事は言えないけど。

「まあ、溜め込みすぎるのも体に悪い。

つてなわけで今日はトコトンまで付き合っただけから思い切り愚痴れ」

「へ？ ……本当に、良いのか？」

思い掛けない言葉に体が小刻みにプルプルと震えた。

必死に押し隠してきた感情の堤防が壊れかける。

ヤバイ。喉に胸中の言葉が絡まる。ポツリポツリと愚痴った事は今までにもあったが、それはオレの鬱憤の一割にも満たない小出しだった。思いつきり吐き出したら引かれてしまふと思っただけで常にセーブしてきた。

それを、今、この場で ぶちまけていいのかい？ マイフレンド？

「ああ、思う存分ぶちまける」

親友のGOサインは、ミサイルとなってオレの中にある我慢という名の堤防へ見事に直撃して、跡形も無く破壊した。ガラガラと音

を立てて崩れる堤防は塞き止められていた感情を野に解き放つ。

そして、オレは我慢する事を止めた。

ユラリと。オレは幽鬼のように立ち上がり、喉の調子確かめる。  
ん、んんっ！ よし、良好だ。これならカラオケで五時間はぶっ  
続けで歌えるね。

もちろん歌う曲は『明日があるさ』と『上を向いて歩こう』だ。

次は大きく深呼吸。限界まで空気を吸い込み、一気に吐き出す。  
そんな作業を数度繰り返したオレは、一際大きく息を吸い、留め  
た。

パンパンに膨らんだ肺は苦しい苦しいと抗議するかのよう<sup>に</sup>に気管  
を攀じ登ってきやがる。やれやれ、せつかちなボーヤ達だ。抗議な  
どせんでも今すぐ解放してやるよ。

天岩戸の如く閉ざされていたオレの口が開く。ようやく抜け出せ  
る場所を見つけた空気どもは我先にと其処へ殺到するが、オレも夕  
ダで出してやる気は無いぞ。精々オレに協力してくれ。

自由を求める空気どもをオレは振動と言う手法で加工する。

無為の存在をもう一次元上の存在へ。

オレの心の声を宿す存在へ。

そして それは解き放たれた。

「ツツツツツげんじゃねええええエエエエエエっ！！！！！」

恐らくは生涯最高の咆哮。

今後百歳まで生き抜いたとしても、これ程の叫びは二度とできないかもしれない。

オレはそんな事を心の何処かで思いながら、有らん限りの声音で続ける。

「なんでだ！？　なんでオレの恋は毎回毎回あんな展開で終わるんだ！？

オレが何かしたか！？　オレが何かしたのか！？　オレが何かしたんですかああああああっ！？　誰でも良いから答えてくださいやがれエエエエエエエ！！！」

ああ、こりゃーダメだな。もう止まらない。止まる気も無いが。一年近く溜め込み続けた怨み辛みそして怒りとちよっぴりの哀しさ。

ついでに青春のほろ苦さもふんだんにブレンドして腹の其処から爆発させる。

「そりゃ最初の一回目は悔しかったさ！　ちよっただけ未練もあつたさ！！」

だが、オレも漢だ！！　いつまでも未練たらしく固執したりなんかしない！！

その人の幸せを祈って笑顔で見送ったよ！！　そこは認めてくれるだろう！？　なあ！？」

自分でも誰に向かって言っているのか分からないが、少なくとも傍らの親友に向けてではないな。まあ、激情の吐露なんて大抵はこんなもんだよ。

むしろ、こつやって一本の理性を保っているオレを褒めて、誰か。

「はははっ！ そうだ。そこはいいんだ。よくはないけどいいんだ。問題は……問題はなあ……！！！」

息を吸い込む為に一拍、間を置き。

「オレの好きになる人が悉く雨宮に告白してるってことだああああっ！！！」

ちなみに雨宮と言うのはオレのクラスメイトで、フルネームは雨宮直紀<sup>まみやなおき</sup>。中学時代からの付き合いだ。特に顔が良いと言うわけではなく、頭や運動神経も自慢じゃないがオレの方が良い。

だと言うのにオレの好きになった人達はみ・ん・な  
雨宮にゾッコンラブ。

どんな理不尽だよ、これ。

「しかも!」

そう。ここで終わらないのがオレの恋。むしろ、ここまでは序の口。ここからが本番。そして恐らくこれが、親友や友人が何度も告白に失敗しているオレをからかおうとしない最大の要因。腫れ物でも扱うかのように接してくる原因だ。

それは……。

「なんで今まさに告白しようと息巻くオレの目の前でみーんな雨宮に告白するんだよっ!？　なんでオレは好きな娘が雨宮に向かって恥らい頬を赤く染め上げる告白シーンを六度も見せつけられてるの!？　蛇の生殺しだってもうちょっと優しいぞ!？」

純情な心に容赦無く突き刺さる、あのナイフの如き苦痛。

あの苦しみは言動じゃ到底表せない。

- 一回目はシヨックで枕を涙で濡らし。
- 二回目は親友に縋り泣き。
- 三回目は諺って本当だったんだなーっと達観し。
- 四回目は屋上から地上を見下ろし。
- 五回目はオレって誰かに呪われてる？　と疑った。
- そして六回目の今回は大爆発。

さ・ら・に・!

「雨宮の野郎……曖昧に笑うばかりで承諾も断わりもしねえんだあ  
あああつー!!」

お陰で六人＋一人の計七人は互いを敵と認識して、毎日毎日学校で骨肉の争いを繰り広げている。正直、好きだった娘達が一人の男を巡って争う様を毎日クラスでまざまざと見せ付けられるのは拷問だと思ふ。一時期は本気で不登校になりかけたぞ。

だが、健気なオレは頑張った。ポジティブに生きようとした。

そうだ。オレの好きになった人達が雨宮を好きになるのなら、雨宮にはきつとオレには無い何かがあるんだ。それなら雨宮と友達になつて良いところを学ぼうと。漢を磨こうと。そう思った。そしてオレは行動した。

「ある日の事だ。オレは鋼鉄の意思で嫉妬に滾る醜い心を押し潰し、オレの好きだった娘達に取り囲まれる雨宮を助け出したことがあつた」

「ああ、そういえばあつたな。この聖華高校でも指折りの美少女が五人、弁当箱を持って雨宮に『どれか一つ選んで!』とか言つて迫つてたことが。もし、お前が雨宮を強引に連れ出さなければ、昼ドラも真つ青な愛憎劇が展開されていただろうなあ」

「雨宮からも『助けてくれてありがとう』って泣き付かれるほど感謝されたよ。

そこまでは良い。程好い充実感があつたし、お陰で雨宮とも仲良くなれたからな。

問題なのは そのせいで彼女達のブラックリストに載せられちまつた事だあつー!

あの日を境に彼女達と出会う機会も増えたけど、それは断じて才

レの願っていた出会い方ではない!!」

「まあ、冷たい微笑で一瞥されたり、面と向かって『私と直紀君の恋を邪魔しないでよ!』とか罵倒されたり。極めつけに『あんまり邪魔だと、埋めるわよ?』なんて言われるのは辛いよな」

実を言うとそれだけではない。

むしろ、それは少数派で、他の者は城《雨宮》を攻める前に外堀から落とそうと思ったのか。あの手この手でオレを懐柔しようと躍りになっている。

どうやら彼女達から見てオレは雨宮の一番の友達と言う事になっているらしい。

それ自体は嬉しいんだけど、最高に複雑だ。

「……そこで嬉しいと思う辺りがおかしいだろう。

お前にとって雨宮は敵じゃないのか?」

「敵? 何を馬鹿な。仮にも友と呼び合ったのだから味方以外の何者でも無いぞ」

家の家訓は『義に重んじよ。これ軽んじる者は死あるのみ』だ。友達の大切さと偉大さは文字通り骨身に染みている。

まあ、時々ちよつとだけ羨ましいなーつとか殺したいなーつて思う事もあるけど。

「……そうか。お前はそういう奴だったよな」

何故か親友は心底呆れたと言わんばかりの面持ちでオレを見る。

そんなにおかしな事か?

現に友達を大切にしていたからこそ、お前みたいな気の悪い奴等とたくさん知り合えた。道を踏み外そうとした友人と川原で殴り合うという素敵イベントも体験できたんだぞ。

「いや、もう分かったから先いけ、先」

「なんか釈然としないが……まあ、いつか。そうやって雨宮を何度か助けている内にアイツから心の友の称号を貰ってな。

しかし……それは新たな悲劇の幕開けに過ぎなかった」

「悲劇って、今日玉砕した事か？」

「違う。それは関係ない。

いや、関係ない事もないけど、オレの白石遥さんへの告白は関係ない」

「白石遥……あの人か」

ふっ。雨宮の良いところを吸収して進化したオレは勝負に打って出た。

一ヶ月ほど前から憧れていた清楚で可憐なお嬢様、白石遥さんに告白しようとして三年校舎まで出向いたのだ。

結果は いつも通りだった。

何故、三年校舎に雨宮がいたのかは知らない。  
だが、人気の無い渡り廊下で白石さんは雨宮に

人によつては一年の内に六回も告白しようとするオレを軽蔑する奴もいるだろう。

だが、これだけは言わせてくれ。

断わられても良い。嫌われても良い。何ならビンタされても良い。だから、せめて告白だけは完遂させてくれ！ と。

「……いかな。ちょっと思考が別の所についてたよ。」

まあ、とにかく。オレはいつも通り告白する前に散ったんだ。

傷心のオレはそのまま去ろうとしたんだけど……そこで聞き慣れた声が響いた」

「聞き慣れた声って……話の流れからすると、お前の好きだった誰かだよな？」

「正確には、全員だ。久々に全員集合しているのを見たよ」

あの時は本当にビビった。気がついたら七人の少女によつて雨宮が壁際に追い詰められ、今にも泣きそうな顔でオロオロと周囲を見回しているのだ。

オレは思った。君達は一体どこから湧いて出てきたんだと。

いつもだったら助けてやるところだけど、その時のオレは傷心中。イマイチ気が乗らない。どうしようかと悩んでいると、不意に拳動不審な雨宮と目が合った。

雨宮の表情が九死に一生を得たと言わんばかりに喜色で彩られる。そのままオレを呼ぶのかと思ったのだが、雨宮は一度思い留まるかのように開き掛けた口を閉ざした。そうして再び開いた口で、何を血迷ったのか、こんな事を言いやがったのだ。

『し、心友の如月君が当分は誰とも付き合わないって言うててね。だから、俺も今は彼女が欲しいとか、そういうのは全然まったく考えてないんだ。』

とりあえず如月君が誰かと付き合い始めるまで、俺は誰とも付き合わないから……ごめんな!』

そう言うて兩宮は彼女達の包囲網から強引に脱出した。

いや、もう本当にオレも、彼女達も呆然としたね。

「信じられるか!? アイツは親友だの心の友だの勝手にオレを崇めるだけ崇めておいて、自分可愛さに売ったんだぞ!? しかも結構あっさりと!」

いくら追い詰められていたとはいえ、これなら普段通り助けを求められた方が百万倍マシだった。それからの事は思い出さたくも無い。彼女達は気を取り直すと早速オレの搜索を開始して、昼休みの時などはずっと追い回された。

オレが抗議する度に『誰でもいいから付き合いえ!』と返してくる嘗て好きだった人達。ありゃー新手の拷問だね。心の弱い奴なら二度と立ち直れないぞ。

親友はようやく得心が言ったと軽く頷く。

「なるほど。だから授業が終わったら直ぐに逃げたのか。道理でアイツ等がお前を探してると思った」

「や、やっぱり探してたのか?」

「まあな。何人かにお前がどこへ行ったのか聞かれたよ。はぐらかしといたけどな」

「悪い……今度マジでなんか奢るよ。にしても……ヤバイよなあ。いつまでも逃げ切れないよなあ」

所詮は一对七。今日逃げ切れたのは彼女達の準備が不十分だったからだ。

明日は恐らく、万全の体勢でオレの捕獲に乗り出すだろう。もし捕まったら　うん。考えたくもないな。

「……なあ、如月。今更こんなこと言うのもなんだけどな、お前つて」

親友は改まって何かを言い掛けたが、それが最後まで紡がれる事は無かった。

親友の言葉を遮るかのようにドカーン！　っていう轟音が屋上いっぱいに響いたのだ。続けてガンッガンッガシャン！　っと地面をバウンドしてきた硬い何かがおレの横のフェンスに激突する。

オイオイなんだとおレはフェンスの方を見る。

其処には　　拉げたドアが減り込んでいた。

あれ？　オレの記憶に間違いが無ければこのドアって鉄製だよな？　なんで拉げてんの？　なんでフェンスと熱烈に抱き合ってるの？　というか中心にくつきりと残る小さな足形は一体なにさ？

オレは混乱しつつも、このドアが元々在った場所、屋上の出入り口の方へと振り返る。そして直ぐに後悔した。見なけりゃ良かったと。

「見つけたわよ、如月大紀！」

そいつは小柄な体躯には似合わない大声でオレの名を呼び、失礼にもビシッと指差してきやがった。

「……最悪だ」

よりもよって一番見つかりたくない奴に見つかってしまった。

秋崎弓。雨宮に迫る七人の中では一番の古株。

ついでに言うならオレの中学からの天敵で、大嫌いな女である。これは秋崎も同意権らしく、顔を合わせる度に行く嫌味の応酬は最早挨拶の域だね。

何でも雨宮とは幼馴染みで、家が隣らしい。

そのせいで家に居ても落ち着かないとぼやいていたな、雨宮の奴。ここだけは本気で同情するよ。まあ、裸で風呂場に乱入して来るって深刻な顔で相談された時は、流石に握り拳が飛び出たけど。

秋崎はズンズンとオレの傍まで歩み寄ると腰に手を当てて踏ん返り、いつも通りの傲慢口調で命令してきた。

「アンタ、とりあえず誰でも良いから付き合いなさい!!」  
もし邪魔な他六名の誰かと付き合い合ってくれるなら、特別に私と直紀君の子供の名付け親になることを許可するわ!!」

黙れ、怪力妄想女。

言われるまでも無く付き合えるもんなら付き合いたいよ。口には出さないけど。

「……どうしてオレがここにいるって分かった。野生の勘か？」

「それを言うならお・ん・なの勘よ! 相変わらず失礼な男ね……  
どうして直紀君はこんな奴と友達なんてやってるのかしら?」

そりゃ、お前より良い奴だからだろうが。

まったく、クラスが違うのが不幸中の幸いだな。

もし同じクラスならオレはストレスで死ぬ自信があるね。

これで容姿はオレの愛した人達と同レベルってーのが納得いかん。  
性格改善に努める。兩宮の奴もおしとやかな女性が好きだって言  
つてたぞ。

「え? 本当? それなら私もちょっとだけ優しくなっちゃおっかなー、なんて」

「嘘だよ。単純女」

ビキリッと。秋崎の米神に見慣れたマーク。顔が良いから迫力あるね、うん。

さて、と。からかうのはこれ位にして逃げるか。

なーんか妙なオーラが秋崎の周りを渦巻いてるし。

「ふっ、ふふ、ふふふ。よ、よりもよって直紀君関連で私をおちよくるなんて良い度胸じゃない　　現世に別れを告げなさい！」

言葉と共に風を切る音。

それが蹴りだと気づく前に体勢を低くしながら前方へ飛び、前転する。

前に一度、油断して喰らった際には酷いことになった。具体的には、食物を思いつきりぶちまけ、過去に殺人事件に巻き込まれて死んだはずの兄貴と綺麗な川原で雑談に興じた。もう二度と、あんな感動の再会はごめんである。

「チツ！　やるわね！！」

オレが体勢を整え、振り返ると同時に今度は回し蹴り。

スカートが翻り、下に着込んだ体操着が露になる。

下着、スパッツと来て体操着。どうやらオレの忠告をちゃんと聞いているようだ。

いくらK-1選手を1RKOできそうな秋崎も性別上は一応女だ。下着は問題外として、スパッツもオレはお勧めしない。

まあ、そもそもスカートで蹴りを放つこと自体ありえないが。オレは前髪をチツと掠っていく憎らしいくらい華奢で綺麗な足を見送りながら、そう思った。

「ってーか良心は痛まないのか！？　彼女を作ってくれて頼むならまだしも問答無用でオレの意識を狩りに来るって！？　いくらなんでもルールっていうか常識があんだらう！？」

「はっ！ なに甘いこと言ってるのよ！

恋にルールは無い！ 恋は戦争同然よ！！

安心しさない……知略謀略策略。何でもアリって言うのが私達の  
売りだから！！」

「お前のそれは暴力だああ！！」

吐き捨てながら、オレは屋上の出入り口へ駆ける。

これ以上こんな奴に関わっていたら命がいくつあっても足りん。

「あつ、こらー！ 待ちなさい！！」

待てと言われて待つ奴がいるか！

オレは後ろの怒声を無視して屋上を飛び出すと、颯爽と階段を駆け下りて行った。

「 蚊帳の外、か」

屋上に一人取り残された俺は、何ともなしに呟く。  
まあ、巻き込まれなかつただけ僥倖だが。

「にしても……如月と秋崎の奴、コレ、どうすんだよ」

目の前には見るも無残に拉げたドアとそれを抱擁するフェンス。  
秋崎……出入り口から十メートル以上鉄製のドアを蹴り飛ばし、  
かつフェンスに埋める異常な脚力は素直に感嘆するよ。もちろん、  
それ以上に恐怖の度合いの方が大きいけれど。

ここに残っていたら俺が犯人にされそうなので、さっさと退散する事にしよう。

重い腰を持ち上げ、不意に青空を眺める。澄み渡る空は実に清々しい。

だからこそ、余計に心労が湧いて来る。

「まったく。如月は良い友人だけど、あの好みだけはどうかして欲しいと本気で思うよ」

確かに如月が想いを寄せた女性はみな美女、美少女だ。

そんな女性達に囲まれた雨宮を羨ましいと言う男子生徒は星の数ほどいる。

だがな 俺は雨宮と立場を代わりたいたいなんていう物好きは、未

だかつて一度も聞いた事が無い。

正直、さっき現れた秋崎弓なんて俺からしたらまだマシな方だ。

雨宮を慕う他の五人 いや、今日入った奴も含めて六人か。

そいつ等ははっきり言ってまともじゃない。

真剣持ち歩く人とか世界的財閥のご息女とか伝説の武術家の娘とか。

それに類する奴らをまともだと言う奴はいないだろう？

思えば如月。お前が好きになる奴って、小学校の時から一癖も二癖もある奴ばかりだったよな。友人に関しては普通なのに、好きになるのが奇人変人ばかりって言うのが未だに謎だ。いくら美女、美少女と言っても俺はお近づきになりたくはないね。

もしかしたら秋崎を嫌っているのって、友人でもタイプでも無いからか？

まあ、いくら鉄製のドアを蹴りで拉げさせ、傲慢な態度に妄想的な未来設計を描く秋崎も他の六人と比べたら至って『普通』だ。アイツの食指が動かないのもわからんでもない。もちろん理解はできんが。そこで俺は口元を微かに歪め、自嘲する。

「まあ、現状で一つだけ確かなのは……」

流れ行く雲の一つに自分を重ね、俺は久々に自らの迂闊さを呪った。

秋崎が現れた時点で気づくべきだったのだ。

如月の魂の咆哮。アレだけの大音量で自己主張すれば、アイツを

探す変人どもが遠からず此処へ訪れるだろうと。

ドアを失った出入口。

その奥から階段を駆け上ってくる複数の足音と言い争いの声が喧しく響いている。

最早、逃げ場は無かった。

俺は無事なフェンスに背を預け、哄笑する。

「ただの脇役に過ぎない俺に、この展開は酷って事だ」

迎い来るは万人が認める超変人軍団。

さて。脇役の俺は、いったいどうやってこの佳境をやり過ごそうかな？

ただの脇役に過ぎない俺（後書き）

まだ導入部なので変人度は低いですが、ここから徐々に上昇していくので気楽にお待ちください。

## 忘れられない初体験

とある朝の出来事だ。

遅刻ギリギリの時間に家を出た俺は、聖華高校への通学路を全力疾走していた。

「クソツッ！ アラームを設定し忘れるなんて、不覚！！ 一生の不覚！！」

激しい悪態は状況の深刻さの表れだ。胸中には暗雲の如き絶望が広がっていく。

これで、俺の皆勤賞の夢は絶たれるのか？

これで、俺の早寝早起き健康生活の証拠は消えてしまうのか？

否！ 断じて否！

この程度の苦境で根を上げるなど、それでも奇人変人犇めく聖華高校の学生か！

思い出せ。俺のクラスメイトを。幾度と無く無残な告白失敗記録を更新し続けている如月を。それでもなお諦めない不屈の闘志を！！

ここからだ。俺はここからだ。そうだろう、今井和哉！

今こそ中学時代に陸上部で鍛え上げた脚力を披露する時だ。

さあ、俺はここから風になる！！

「……って、これは俺のキャラじゃねえな」

前に。ヤル気は大気中に霧散した。ペースも若干落ちる。

やばい。

以前、こういう無駄に熱いテンションで三十分掛かる道程を十分に走破した熱血野郎がいたから真似してみたけど、予想以上に肌合わない。まるでガキのお遊戯に強制参加させられたみたいだ。

「……見られてない、よな？」

主にご近所の麗しいおばさま方。

ネタに餓えているあの方々なら即座に井戸端会議を開催して、今日の夕方には俺の母親まで話が行き渡っている事だろう。シャイでナイーブな好青年を気取っている俺としては致命打に成りかねん。だが、どうやらその心配は杞憂なようで、運の良い事に辺りには人っ子一人見当たらなかった。

「ふう」

とりあえずの危機は脱したか。

「それにしても本当に迂闊だった……高校の空気に毒されたかな？」

俺の通う聖華高校は国内でも有名な進学校であるのと同時に、奇人変人の巣窟だ。

一見すると無法地帯と思われがちだが、実はある法則が存在する。

それは詩として代々上級生から下級生へと受け継がれ、決して逃  
れられない宿命として定着しているという。

その詩とは、

『一年自覚し、二年時開花。三年なつたらお仲間だ』

というヤケにノリノリな奇人変人誕生までの流れである。

つまり一年の間に自分の変な部分を自覚。

二年でそれを包み隠さず常にオープンに。

三年になつたら聖華高校に相応しい奇人変人になると言っている  
わけだ。

はつきり言おう。これは呪いだ。貞 のビデオだ。

現に俺の知り合いの何人かは既に仲間入りを果たしている。

変人好きとして名高いクラスメイトの如月は昔から世にも奇妙な  
性癖をしていたらしいから端っから除外だ。それでも一年の頃は  
大  
人しかつたんだが、二年生に進級してから急に頭角を現しだした。  
きつと一年は熟成期間だったのだろう。しかし、真つ当だった友人  
達までもがおかしくなっていく光景はホラーとしか言いようがない。

今では変人キラーとして学校中にその名を轟かせる雨宮も最初は  
普通の奴だった。

いや、この言い方は語弊がある。あいつは今でも普通だ。身を置  
く環境以外はな。

恐らく、フェロモンみたいなので奇人変人を虜にってしまうのが、  
雨宮の変な体質なのだろう。その奇特的な才能を、よりもよって聖

華高校で開花させてしまおうとは、難儀な奴だよ、まったく。唯一の救いは今のところ美人のみが対象なことだな。

ちなみに聖華高校は三学年通して色分けとかされないため、誰がどの学年か見分けづらい。だが、その人の性格というか言動で大体どの学年か見当が付くと言われている。お陰で、普通人の俺は二年なのにもつばら一年と間違えられるわけだ。

それでも不登校やら精神病に陥るヤツがいないのは、ひとえに居心地が良いからだろう。その点だけは俺も認めている。

「けど、気をつけないと……気を抜いたら魂ごと持ってかれそうだし」俺は改めてコツチ側に残り続ける決意を固めて、高校までの最後の曲がり角を軽いステップで直角に曲がる。

「きゃっ!?!」

が、その途端に何かが俺の胸板の下の方に激突した。

俺は長身の部類に入る180cmちょっとだから、ぶつかった何かは140ぐらいか?

いや、それよりも「きゃっ!?!」ってなんだ。

「いたた……」

幼いソプラノボイスが下から聞こえてくる。

まさか、俺は子供を弾き飛ばしてしまったのか!?

同年代と比べてガタイが良い俺だ。

しかも結構勢いをつけてぶつかったから、下手したら怪我しているかもしれない。

「だ、大丈夫」

かい？ と慌てて下を見た俺は それ以上の速さで顔を上げた。いや、別にぶつかつた娘が見るも無残な大怪我をしていたわけじゃないよ。

見たところ怪我は無かつたし、尻餅ついているだけだった。本当なら直ぐにでも助け起こして上げたいけど、ただ、ほら。わかるだろう？

男って生き物は、時には目を逸らさなくちゃいけない時もあるって。

それが幼い声に反して高校生らしい少女ならば尚更だ。

背中が冷や汗で濡れるのを自覚しつつ、俺は代わり映えのしない青空を一心に眺め続ける。ああ、今日も良い天気だなあと思い始めたところで、件の少女が俺に慌ただしく声を掛けてきた。

「あ、あの、すみませんでした！

わたし、余所見してて……本当にすみませんでした！！」

恐らくは頭を下げているのだろう。

見ていなくとも雰囲気でわかる。

だが、それは完全に見当違いの謝罪だ。

「いや、今のは俺が全面的に悪かつたよ。

人がいるなんて考えもせずに来た俺がね」

一応もう一度言っておくが、俺は本来好青年だ。

自分の非はちゃんと認めるし、目を逸らすべき時はちゃんと逸らす。

ああ、朝陽が眩しいな、チクシヨウ。

「あの……なんでさつきから空を見ているんですか？」

流石に何時までも上を向いたままの俺を疑問に思ったのか、少女は遠慮がちに訊いてくる。愚問だね、お嬢さん《フロイライン》。俺が何故空を見ているかって？

それはね、

「……下を向きたくても向けないからかな？」

「え？ ……きやつ!？」

どうやら気づいてくれたらしい。布の衣擦れの音が聞こえてくる。やれやれ、これでようやく朝陽ともオサラバだ。

ホッと胸を抱き下ろして視線を戻した俺は、改めて少女を見た。先程と比べて少女の上半身が起き、スカートがあるべき所へ戻っている。

ついでに顔の方もほんのりと上気して赤くなっていた。

「えっと……見ましたか？」

少女は俯いたまま聞いてくる。

何を、とは言わない。俺も聞かない。

「……今日中に忘れる事を約束するよ」

本当は「見てない」ってコメントするのが双方にとっても一番良

いんだろう。

けど、そんな場凌ぎの気休めは好きじゃないんだよな、俺。

この娘には悪いが、ここはハッキリさせておこう。

俺は見た！ と。

「うっー……」

「……何から何まで本当にゴメンね」

気まずい空気の中で俺は少女に手を差し出す。

いつもでも少女を路上に放置するなんて、それこそどうかと思っ  
しな。

「あ、すみません」

俺の誠意が伝わったのか。少女は片手で傍らに落ちたカバンを掴  
み、もう片方の手で俺の手を握り返してくれた。柔らかくて、小さ  
な手だな。立ち上がる際に掛かった体重も軽いし、身長もやっぱり  
低い。これで聖華高校の制服を着ていなければ、中学生と間違えて  
いたかもしれなかった。

あの高校なら小学生にしか見えない女生徒がゴロゴロいるので違  
和感もへったくれもない。特に如月がアタックした一人は、幼稚園  
児にしか見えない風貌だったのを覚えている。あの時は流石に思っ  
たね。それは人としてどうなんだ、と。

「大丈夫？ 怪我とか無い？」

こうして見る限り大丈夫そうだが、本人にしか分からない怪我も  
あるだろう。

一応、俺が用心して訊くと少女は俯かせていた顔をようやく上げて、

「ん、大丈夫です。痛いところも無いですし……え？」

何故か俺の顔を見て固まった。

そのリアクションは予想外です。そんなに酷い顔だったか？

可愛いし、ちょっと好みのタイプだなーって思っていただけに物凄く傷付くんですけど。

いや、俺の不注意が少女に怪我をさせ掛けたんだから、これぐらいは因果応報か。

覚悟を決めた俺はこんな顔で良いならいくらでも貶しなさいと、むしろ胸を張ってみる。だが、そんな虚しい俺の虚勢など関係無く、少女は呆然と俺を見つめたまま、

「今井、和哉さん……？」

名乗っていないはずの俺の名前を呼んだ。しかもフルネームで。

「え？」

俺は驚きから何とも情けない声を漏らす。どうやらそれが少女の奮起剤になっただけらしい。

はっと気を取り直した少女はすぐさまカバンを開け、ピンク色の封筒を取り出す。

「あ、あの！ これ、受け取ってください……！」

差し出された封筒を反射的に受け取る俺。

基本的に貰える物は何でも貰うのが俺のスタイルだ。  
其処に状況は関係ない。

「これは……」

受け取った封筒に戸惑いつつ、俺は少女に話し掛ける。

だが、当の少女は封筒を渡すや否や脱兎の如く走り去ってしまった。

わけのわからない展開の中で俺が理解しているのは以下の二つ。

取っ付き難いと言われ続けて十七年。ようやく青春が到来したかもしれないということ。そして俺の皆勤賞の夢が、鳴り響くチャイムによって無情にも断たれてしまったということだ。

時刻は放課後。

俺は学校の裏手に一本だけ植えられている桜の木の下に向かっていた。

春には満開の花を咲かして、それを肴に教職員が酒を飲み交わす  
花見会場。

其処も秋の深まりが目立ってきた十月後半は人通りがぱったりと途絶えていた。

よほどの理由が無い限り、誰も進んで近づこうとは思わないだろうな。

まあ、つまり俺はよほどの理由があるってわけだが。

「そろそろ時間か」

俺は携帯に表示される時刻が三時に差し掛かろうとしているのを確認して、わずかに歩調を速めた。どうしてこんな人気の無い桜の下に向かっているのか。それは俺のズボンからはみ出すピンク色の封筒に関係している。

皆勤賞の夢が断たれたあの後。

俺は『人の不幸は松坂牛を最高級ワインでグイッと飲み込む味』と表するニコニコ顔の超絶美人女教師の手によって遅刻欄にチエツクを入れられ落ち込んだ。物凄く落ち込んだ。心情的には床に減り込んでマントルに達するぐらい落ち込んだ。

幼稚園、小学校、中学校、高校と一度も遅刻・欠席をした事の無いのが何気ない自慢でもあったのに。憂鬱過ぎて体中から力が抜けて、普段は真面目に受けている授業にも身が入らない。

雨宮を狙う女傑共が、何故か如月を血眼になって探していたらしいが、それすら気にならなかった。そんな鬱状態から立ち直らせてくれたのは、登校中にぶつかって少女から手渡された一通の封筒。その中に収められていた一枚の手紙だ。

『今日の午後三時に学校裏の桜の木の下で待っています。  
恥かしいので、必ず一人で来てください。』

新井和美』

胸中に蔓延る憂鬱が一瞬で消し飛んだな。むしろ清々過ぎて最高にハイな気分だ。

そのせいか帰りのHRで性根が腐っている超絶美人女教師はつまらなそうに舌打ちしてやがった。一応は美人のクセに、そんな性格だからいつまで経っても結婚出来ないんだよ、三十路が。今の俺ならそう鼻で笑い飛ばせる。殺されるから絶対に口には出さないけど。

基本的に教師には最大限敬意を払う俺だが、何故かは知らんけど、あの担任に対してだけは遠慮とか尊重とか、ちつともする気にならない。好き嫌いじゃなくて、もっと深い部分で相容れないというか……。

(……まあ、今はどうでもいいか)

あんな担任の事なんて、この際無視だ。

脳裏から叩き出そう。今の俺には害悪にしかならん。

(そうだ。俺は今から人生最高の山場に挑むんだ！

雑念なんて抱いてる余裕はない！)

グツと拳を握り締め、俺は勝負の場へと勇み歩く。

ここまで来ると擦れ違う生徒もいない。こうして実際に来てみると本当に春とは打って変わって寂しいよな。もっとも、俺にとっては極上のパラダイスなんだが。

(……………いた)

足を止める。

目的地の桜の木の下。

そこには今朝ぶつかった女の子が、カバンを片手に挙動不審な様子で立っていた。

(本当……だったのか)

実を言うと半信半疑だった俺は嬉しすぎて涙を零しかけた。

チクショー！ 感動で人が泣けるってーのは本当だったんだな！  
今まで一度もそういう理由で泣いたことなかったから、みんな冗談とかやらせ何じゃないかって思ってた。けど、そうじゃないんだな！

(あっ、俺に気づいた)

キョロキョロと辺りを忙しく見渡していた少女 いや、新井さんは俺を見るなりホッと胸を撫で下ろした。次いで、気恥ずかしそうに頬を赤く染める。あまりの可愛さにグラツときたね。急所に当たったね。効果は抜群だね。

俺はロリコンじゃないよね？

「来て、いただけたんですね」

新井さんは聖華『高校《ここ重要》』の制服の胸元のリボンを弄りながら、俺にチラチラと視線を向けた。

「……とりあえず俺は正常だ」

「え？ なにか言いましたか？」

「いや、なんでもないよ」

ただの確認サ。

俺は近所のおばさま方に見せる素敵フェイスで胸中を覆い隠しながら、新井さんの居る桜の木の下まで進む。あんまり近づき過ぎると見下ろしちゃうから、出来るだけ視線が合う位置で立ち止まった。

「あ、あの……それで、何かな？」

此処に向かっている時はそうでもなかったけど、手紙をくれた本人と向かい合うのはやっぱり気恥ずかしい。そのせいか、まるで急かすように訊いてしまった。

俺は内心で自らを罵る。具体的にはこんな感じで。

クソが……！ もうちょっと気の利いた台詞の一つも言えんのか俺は！？

ここは堅実に「待たせちゃった？」とか「手紙ありがとう」「とかだろう！

爽やかなイメージを全面に押し出しつつ会話の糸口を切り出すのが王道なのに！

案の定、新井さんは困った風に俯いて口の中で「モモモと言葉を濁してしまった。

「え、えと、あの、その……」

初っ端から失敗したー！ と悲観に暮れる俺だったが、どうやら神は俺を見捨てなかつたらしい。

「……そうですね。こういう事は、直ぐにはつきりさせておくべきですよね」

「え？ あー、と……」

もしかしなくても棚ぼたラッキー？

絶対に印象悪くしたと思っていたけど、新井さんは全然気にしてないみたいだ。

むしろ、どこか吹っ切れたようで今までとは真剣の度合いがまるで違う。

こ、これはもしかして本当に期待できるのか？

新井ちゃんは何度か深呼吸を繰り返して、一息のうちに言葉を紡ぐ。

「あ、あの！ わたし、学校で今井さんを一目見た時からずっと思っていたんです！

血行も良さそうだし、程好く硬そうな筋肉も好いなあって！！」

ブツ！ と思わず俺は噴き出しそうになった。

いや、確かに俺は同年代どころか日本人の平均よりよっぽど体格は良いよ。

その体格を見込まれて中学の時は陸上部にスカウトされたぐらいだし。

けどさ、いきなりそう来るとは予想外です。

まさか、新井さんって見掛けによらず肉体フェチ？

俺がちよつとだけ啞然としている合間にも新井さんは息継ぎもせずに胸中を吐露し続ける。

「わたしが今井さんを一方的に知っているだけですし、こんなの迷惑だつてわかつてます。けど、どうしてもわたしの気持ちをちゃんとあなたに伝えたいんです!!」

「新井さん……」

ゼエゼエと息を切らす新井さんに俺は目頭が熱くなったのを自覚した。

俺は、新井さんを外見が可愛いつて理由だけで付き合えるものなら付き合いたいと思っていた。もちろん男として可愛い女の子と付き合えるのは感無量だ。それは否定できない。

けど、それだけじゃダメなんだ。

いくら可愛い子だって、俺が本気で好きになれなくちゃ意味なんてない。

つまり俺が何を言いたいのかというと、俺は本気で新井さんに惚れた。

生まれて初めて真剣に人を好きになった。

「だから、あの……」

顔を真っ赤にしながら、それでも決して俺から眼を逸らさない新井さん。

俺も釣られて顔が熱くなる。何ともこそばゆい感覚に襲われながら、俺は次に来るであろう新井さんの言葉の返答をしっかりと考えておく。

新井さんは寸前で眼を瞑り、大きな声で言った。

「好きです！ 殺させてください！！」

「はい！ 喜ん……で？」

……………あれ？ な、なんかちょっとおかしくなかったか？

あ、あははは……嫌だなー。どんな聞き間違いだよ。

付き合ってくださいを殺させてくださいに聞き間違えるだなんて、どっかのバラエティのネタのレベルだよな。

ったく、こんな真剣な場面でボケるなんて何やってんだ、俺。

「よかったぁ……断われたらどうしようって、ずっと思ってたんです」

新井さんは緊張の糸が切れたのか、嬉しそうに瞳に溜まった涙を拭う。

そうやって微笑んでくれると俺も思わず頬を綻ばせてしまう。

何やらガサゴソとカバンを漁って新井さんが取り出したブツを見ても、俺の微笑みが途切れる事は無かった。

「ねえ、新井さん。一つ訊いてもいいかな？」

「あ、はい！　なんででしょうか？」

「うん。大したことじゃないんだけどね　その手に握っているのは、なに？」

もし此処に第三者が居れば気づいたかもな。

俺の浮かべる微笑みがピクピクと激しく引き攣っている事に。

「なにつて　日本刀ですけど？」

不思議そうに可愛らしく小首を傾げる新井さん。

うん。そうだね。それはどっからどう見ても日本刀だね。しかも抜き身だね。

でもね、俺が聞きたいのはそういう事じゃないんだ。

それがどうやって手提げカバンの中に納まっていて、これから何に使っつもりなのかなんだ。

チャキツと言う音を立てて、しっかりと握り直される日本刀。

え？　なにこれ？　ドッキリ？　カメラどこ？

まったく趣味が悪いなーって俺は割りと必死にドッキリカメラを探索し始める。

その間にも新井さんはカバンを桜の木の下に置いて、

「あの、大丈夫ですから。絶対に、痛くしませんから。だから

動かないでくださいね」

トンツと。軽い足取りで俺の懐に潜り込んだ。

「!?!」

悪寒なんてもんじゃない。小三の頃、自動車に轢かれた時の感覚が蘇る。

自分の思考以外の全てが遅くなって、一秒が引き延ばされる、あの独特の感覚が。

俺が咄嗟に後ろへ跳べたのは、その感覚をあらかじめ知っていたからだろう。

ヒュンツ！ という風切り音が胸元から鋭く響き、俺は落ち葉が目立つ地面に尻餅をついた。

破裂せんばかりのビートを刻む心臓に急かされ、恐る恐る胸元へ手をやる。

そこには横一線にパツクリ切られた制服が

「もう！ 動かないでくださいって、言ったのに」

眼前には不満そうに愚痴を漏らす日本刀を振りぬいた状態の新井さん。

えーと……マジですか？

「ど、どつして……」

もうホント切実にさ。

どうしたら恥らいのある告白から一転して辻斬りシーンに変更できるんだ。

これはアレか？ 殺したくなるほど好きなんですって展開か？

俺の疑問に、新井さんは照れ臭そうに日本刀を弄りながら答える。

「お父さんやお母さんの言いつけなんです。

好きな人が出来たらこうしなさいって。

ずっと前から教えられていて……ひょっとして、わたしおかしいですか？」

うん。おかしいね。君の両親の頭はおかしいね。

それを実践する新井さんもおかしいね。

ついでに物理法則を完全に無視しているそのカバンもおかしいよ。

……待て。落ち着け。ここで取り乱したらダメだ。よく言うだろう。

戦場では慌てた者から死んでいくと。

俺は何とか平常心を保とうと軽く深呼吸をする。

新井さんは何を勘違いしたのか、そんな俺を見て少し表情を曇らせた。

「あの、もしかして痛いのが心配なんですか？

それなら大丈夫です！ わたし、初めてじゃないですから！」

「初めてじゃないの!？」

驚愕の新事実どころか殺人犯を発見しちゃった!？

新井さんは一気に表情を蒼白に崩した俺を不思議そうに見やると「あっ!」と声を上げて、パタパタと両手を振り回した。

「ち、違いますよ!?! 初めてといってもそれは練習の話で、カエルとかネズミの事です!?!」

フォローになってねーよ。

むしろ現実味がありすぎて下手な殺人犯より怖いんだけど。

一瞬、とても楽しそうにカエルとかネズミを解体する新井さんを想像しちまったじゃないか。絵的にホラー映画も真つ青だぞ。それと両手は振らないで。日本刀がカチャカチャ鳴ってとっても怖いから。

「なんで……好きになった人を殺すの?」

もうこの際だから殺す殺さないには目を瞑ろう。

軽く現実逃避が入っている気はするけど、この人と常識で語り合っちゃダメだと直感が告げている。すると新井さんはちょっと真剣な顔付きになった。

「初めてが好きなお人だったら、次からは何も感じなくなるってお母さんに教えられました。それがどういう意味かはわからないけど、たった一度しか感じられないなら、わたしはあなたでしっかり感じておきたいんです!」

あ、なんだ。愛情は憎しみの裏返しとかじゃなくて、一応は本気で俺の事を好きなのか。なるほど。なるほど。最高に複雑だね。というか『次からは』ってなんだ?

もしかして新井さんの家系はリアルヒットマン? ゴゴ13?

それと何も感じなくなるといふのは機械的になるといふ意味か、それとも罪悪感の方か……何となく両方っぽいな。

「動かないでくださいね？ 本当に大丈夫です！ わたし、いっばい勉強してきましたから！！」

それは暗に俺を一撃で殺せると言っているのかい？

心情的には逃げ出したいけど、情けない事に腰が抜けて動けない。さっきの一闪の記憶が脳裏を掠めて膝をガクガクと震わせる。

クソツ！ 俺は一般人なんだよ！

確かに変人の巣窟である聖華高校に通ってはいる。

だけどな、いくら変な部分が開花しているはずの二年生だからって通行人Aとか、その他大勢の一人なんだよ！！

それがなんでこんな目に……ん？

あ、あれ？ そういえばすっかり聞き忘れていたけど……。

「ね、ねえ、ちょっと良いかな？」

「はい？」

「……新井さんって、何年生？」

「三年ですけど……それがどうかしましたか？」

あ、年上だったの。全然そうは見えなかったよ。

これからはちゃんとした敬語を使わないとな。

ははは、そうか三年生か。新井さんは聖華高校の三年生か。

奇人変人の最終形態と呼ばれる三年生なんだ。

ははは 俺、マジで死ぬかもしれない。

「そろそろ、いいですか？ わたし、もう我慢できないんです」  
なにを？

「お願いします」

だからなにを？

「わたしに あなたの全てを見せてください」

それは内臓も含めてかい？

新井さんはどこか恍惚とした笑みを口元に浮かべて、大きく日本刀を振りかぶる。

沈み掛けた陽を浴びて輝く刀身は、キラキラと眩い反射光を辺り一面に散布していた。

ゴクリと。意識せずに唾を飲み込む。

まるでそれを合図にしたかのように、新井さんは俺の頭上目掛けて日本刀を振り下ろした。

「つてうわあああああ！？」

死ぬ。俺の思考がその二文字で埋め尽くされた。俺は本当にここで死ぬのか？

今朝道端でぶつかった女の子に渡されたのはラブレターじゃなくてキルレターでした的なノリで殺されてしまうのか？

……ふざけんな。

そんなどう考えてもコメディにしかならない展開で殺されて堪るかあー!!

バシッ！ と俺は我武者羅に手を突き出して思いっきり両手を合  
わせた。

生への執着の成せる業か。手と手の間にはしっかりと受け止めら  
れた日本刀の刃がある。真剣白刃取りって本当にできるんだなーっ  
て痛い痛い！ 刃が手の平に食い込んでるって！ 血が出てるって！

「あわわ！ は、早く手を離してくださいー!!」

そんなに俺を殺したいのか!?

今、この状況で手を離す事は即デッド・エンドに繋がるぞ！  
比喩じゃなくてマジで！ しかも新井さん、徐々に身を乗り出し  
てきてるし!?!?

こっとなったら、一か八か説得するしかない!

「あ、新井さん！ 俺の話を聞いてくださいー!!」

「え？ あ、はい」

俺の必死さが伝わったのか、日本刀から少し力が抜ける。

脱出できるほどじゃないが、十分に話をできるぐらいの余裕はで  
きた。

よし！ とりあえず良心と常識の方面から攻めてみよう。年上ら  
しいからもちろん敬語で。

「こ、こんな事して、本当に新井さんは満足なんですか!?!」

人殺しは立派な犯罪ですよ！？ よく考えてみてください！  
本当はあなただって、こんな真似はしたくないはずですよ！！」

さあ、どうだ。良心の叱責があるだろう。常識が今の正当性を揺るがすだろう。

わかつたらさっさと刀を手放してくれ、お願いします！！

そんな俺の必死さとは裏腹に新井さんはちよつと戸惑った風に眉を顰めた。

「でも……わたしが殺さなくても今井さんはいずれ死んじやうじやないですか。

お父さんも言っていました。早く死ぬのも遅く死ぬのも結末は一緒だって。

わたしにはよくわかりませんが、今井さんがわたしの知らないところで死んじやうなんて絶対に嫌です。今井さんの最後には、絶対に私が付き添います」

しまったあ！！ そもそもいきなり殺そうとしてくる娘に良心と常識を期待した俺がバカだった！ そ、それにしても新井さんって独占欲が強いのかな？

状況が違つたら熱烈な逆プロポーズにも取れるんだけど。それも、これが巷で話題のヤンデレなのか。あ、ヤバイ。顔が熱くなってきたのが自分でもわかる。たぶん今の俺は真っ赤なんだろうな。でも、お陰で活路は見出せた。

「な、なら、もつと一緒にいきましょう！

俺が死んじやつたら話もできないし、思い出も作れませんよ？

俺は新井さんと、もつとたくさん話し合つて、思い出も作りたいたんです！」

今の言葉は本気だ。

こんな状況に立たされているけど、俺は本気で新井さんに惚れた。

恋は盲目というけど、あの言葉は本当だな。あらゆる意味で一途な新井さんを愛しく思っている俺が確かにいる。これが聖華高校で発病した俺の奇人変態性なのだろうか。ふっ、純愛に目覚めるとは俺も捨てたものじゃない。

そう。これは貴い純愛であって決してドMというわけではない。ないったらないのだ。

まあ、そもそも悪いのは新井さんの両親で、彼女は歪んだ教育の被害者だ。

そんな理由で、俺は新井さんと別れたくない。ついでに現世とも別れたくない。

「な、あ………？」

一気に顔を赤く染めた新井さんは落ち着かない様子でオロオロと狼狽えている。

やっぱ恥かしいよな。言ってる俺だって恥かしいんだ。けど、ここでやめるわけにはいかない。

「新井さんは、俺に殺させてくださいって聞いてきましたよね？  
思わず頷いちゃいましたけど、実はあの返事、俺の先走りだったんです。」

だから、今度は俺が新井さんの口から聞きたかった言葉を言います」

俺は一端言葉を切って、肺の空気を一新する。  
たぶん今までの人生の中で一番真剣だ。

「俺と　付き合ってください」

そうして俺は、新井和美さんに告白した。

「あ、ああ、あああああ」

最早完全に俺と新井さんの立場は逆転していた。

傍目から見たら日本刀で斬りかかる新井さんと白刃取りで受け止める俺という中々にシユールな光景だ。

しかし、二人の間に漂うのは命の遣り取りとは別の緊迫した空気。

内心、俺はドキドキだ。

もし断わられたら俺は恋心だけじゃなく、命までも斬り捨てられる。

まさか初めての告白で愛と命を懸ける事になるとは思いもしなかった。

新井さんは口を固く縛って、りんごのような真っ赤な顔のまま、

「　はい」

小さく、けど確かな返事を返してくれた。

こうして俺の初告白は日本刀で斬り掛かれながらというスリリングな状況で成功を収めた。けれど、これは終わりではなく始まりに過ぎない。新井さんのご両親に会うのは怖いし、やっぱり新井さんのカバンの仕組みが気になって仕方ない。

何はともあれ一つだけ確かなのは、ここから全てが始まるんだろ  
うな、という漠然とした予感だけ。

やれやれまったく本当に 忘れられない初体験になりそうだよ。

おまけ

「そういえば、俺を殺した後はどうするつもりだったんですか？」

「どうするって、木の下に埋めるに決まってるじゃないですか」

そう言って不思議カバンから大きなシャベルを取り出す新井さん。

……ああ、だから待ち合わせ場所が桜の木の下なのね。

## でっど・トライアングル関係

「おいしい？ 君ヶ代くん」

「ああ、物凄く美味いよ。流石に仇波は料理上手だよな」

午前の授業が軒並み終わった昼休み。

立ち入り禁止の学校の屋上（何故か扉は新調され、フェンスの一角がブルーシートで覆われている）にて、俺はダラしなく頬を緩ませていた。

それというのも隣に腰を下ろす同級生のお陰である。

あだなみ あさせ  
仇波浅瀬。 聖華高校の二年生だ。

才色兼備で品行方正。周囲への気遣いも良く、腰元まで伸びた艶めかしい黒髪が特徴的な、日本の古き良き大和撫子を体現している美少女だ。何から何までパーフェクトな彼女を慕う者は男女問わず数多く、教師からも絶大な人気を集めている。

クラス内だけに留まらず、聖華高校のアイドルといっても過言ではない彼女は、俺の好きな人でもあった。

一応、彼女の友人の中では親しい……親しい、よな？

まあ、微妙な間柄ではあるが、他の奴らと比べると親睦が深いのは間違いない。

実際、俺の手に納まる男子高校生には少し物足りないサイズの弁当は、仇波お手製のものだしな。

「そう？ よかったあ。自信はあったけど、ちょっと不安だったの」

仇波はホッと胸を撫で下ろした。  
というか、

「そんな心配、必要ないと思うけどなあ」

仇波の作る弁当は本当に美味しい。

惚れた弱みっていう抜群の調味料を抜きにしても、母親の飯より美味しい。

今時、ここまで料理上手な女子高生っていうのも珍しいんじゃないかな？

「ふふ、ありがとね。それじゃあ」

ガサゴソと仇波はカバンを漁って、俺のよりも二倍近い体積を誇る弁当箱を取り出した。スレンダーな見掛けによらず、割と大食いな仇波さん……っていうオチではない。この場にはもう一人、あの弁当を渡すべき奴がいるのだ。

「毒見は終わったから、はい。山巔くん」

「毒見って……」

俺の眩きは聞こえているのか、それとも届く前にシャットアウトされているのか。

仇波は俺のツッコミには何ら言葉を返さずに、爽やかな笑顔で弁

当箱を差し出す。

その先には軽薄そうな男がいた。

やまね とうりや  
山巔峠。俺達と同じく、聖華高校の二年生。

ダレダレで皺の寄ったワイシャツ。学校指定なんて何のその。着るべき制服の上着は入学以来一度としてお眼に掛かったことは無い。耳を覆い隠すぐらいに伸びた髪は薄い茶色で染められていた。顔立ちは男の俺から見ても整っている方で、身嗜みさえキチンとすれば様になりそうではある。

もっとも、本人が言うには纏わり付かれるのが嫌だからこんな格好をしているらしい。当分はこのスタイルを貫き通すと決めているとか。

……未だに、何で仇波がコイツに惚れているのか分からない。

いや、僻みとかじゃなくて本当に分からないんだ。

俺にとってコイツは最も苦手、というか恐怖の権化であって、仇波が一緒でなければ絶対に近づきたくもない人種だ。

コイツを見ると、俗に言う生理的嫌悪感が先行する。

山巔は胡乱な瞳で仇波と弁当を交互に一瞥すると、ハンッとわざとらしく鼻を鳴らした。

「生憎と、僕は腹が減って無くてね。自分で食べれば？」

いつも通り、山巔はにべも無く断った。

胡坐を組んだ足の横。其処に無造作に置かれているのは、未開封

のコロッケパンと缶ジュースだ。どうやら、単に仇波の手作り弁当が気に入らないだけらしい。

「まったく以って甚だしい限りだ。」

俺なんて単なる毒見役なのに。

当の本命が仇波を毛嫌いしているのはどういふことだよ！

……まあ、理由は痛いほどわかるんだけどな。うん。

「そんなこと言わないでください。今日のは、自信作なんですから！」

俺の毒見によつて裏打ちされた自信を全面に押し出して、仇波はズイツと弁当箱を山巔の意外と厚い胸板に押し付ける。けれど、押し付けられた山巔は物凄く嫌そうな顔で弁当を押し戻した。

「自信があろうが無かるうが、僕は絶対に受け取らないよ」

「……………どうして……………？ 私のこと、嫌いなのか？」

目の端に涙を溜めて仇波は山巔を上目遣いに見やった。

正直、傍から見ていても胸に、こっ、グツとくるものがある。

俺だったら一瞬で陥落、グロッキーだ。

しかし、山巔はというと

「ああ、嫌いだね。大嫌いだね。物凄く嫌いだね。ウルトラ嫌いだね。スペシャル嫌いだね。これ以上無いってぐらい嫌いだね。世界の中で思い切り叫べるぐらい嫌いだね。嫌い過ぎて嫌いって言葉の意味が分からなくなるぐらい嫌いだよ」

無表情でボロクソ言っていた。

ここまで清々しく肯定されると、逆にスッキリしそうだった。だが、清楚可憐な女の子である仇波は、その心無い言葉に大変なショックを受けたようだ。

「ひどい……ひどいよ、山巔くん。

せつかく、早起きして……愛情込めて作ったのに」

遂にはシクシクと泣き出してしまった。

流石に居た堪れなくなったので、口を挟むことにする。

「おい、山巔……今のは言い過ぎだ。もうちょっとソフトに包め」

「十分に気遣ったさ。本当なら、これぐらいじゃとても言い足りないよ」

「けどなあ……」

どもる俺を余所に、山巔はコロツケパンを手にとると袋を破く。心成しか、眼光は鋭くなっていた。

「それとも、何かい？ 国歌はあの弁当を受け取って、僕に食べるって、そんな酷なことを言っつもりなのかい？」

「それは……」

正直、何とも言えない。

好きな子の弁当を貪る……まあ、こいつなら無駄に上品に食うだ

ろっけどな。

ともかく食べる野郎の凶ってーのを見たいとは俺とて思わない。  
むしろ断固阻止、妨害上等である。けど、それとこれとはまた別  
問題で どちらかというと、のた打ち回るクラスメイトを見たく  
ないってーのが本音だな。

目を腫らした仇波は悲痛そうに叫ぶ。

「愛情が入っているだけじゃないですか！」

「君にとって、愛情とは痺れ薬のことを言うのかい？」

そうなのだ。

こうして俺たち三人が屋上に集まるようになった初日。  
仇波が持ってきた弁当によって山巔は文字通りシビれた。

ピクピクじゃなくてビクビク痙攣して泡を吹く山巔に俺は蒼白に  
なったのを覚えている。その横で「ああ……」なんて、とてもとても  
艶っぽい吐息を漏らす諸悪の根源。

頬を赤らめ、苦しみに悶える山巔を指先で突つつく仇波はジェイ  
ソンやエイリアンよりも恐ろしかった。

ぶっちやけると、仇波は俗に言うSなのだ。

それもドの前に超が付くぐらい強烈な。

唯一の救いは、好きな人限定であること。

俺の弁当に何の細工もされていないのはその為だった。

「今日は違うわ!」

仇波は大声で言った。

「媚薬よ!」

「なおさら悪いわ!」

俺が叫んだ。

好きな人を擁護したい気持ちはあるが、それはマズイ。とにかくヤバイ。

案の定、山巔は一転して良い笑顔を浮かべた。

「なんだ。そういうことなら早く言ってくれ。一息に食べてやるわ」

「え? ホント?」

「てめえも乗り気になってんじゃねえ!」

今にも手渡されそうな弁当を引っ手繰り、全力で投げ捨てる。

ガラッグシャツと。十メートルぐらい先で弁当の具材が四方八方に飛び散った。

ふう、危なかったぜ。額に浮かんだ汗を拭った処で、小さな拳が頬に減り込む。

「ぐぼおばあ!?!」

捻りを加えられた拳は絶大な破壊力を持ち、ザザアと顔面でコン

クリの地面を滑った。チカチカと点滅する視界に映ったのは、拳を突き出した状態で震えている仇波。

「なんてことするのよ!? せつかく食べてくれるって言ったのに!」

「うるせえ! あの状況で形振り構っていられるかっ!」

こうなったら相手が好きな人だろうと関係ない。

俺にとって今は絶対に、断固として阻止しなければならぬ場面だった。

「私が好きじゃなかったの!」

「ああ、好きだよ! 大好きだよ!」

だからキレイなままでいられるように捨てたんだ! チクシヨ  
「……っ!」

実を言うと、俺達は互いの恋愛対象を知っている。

仇波が山巔を好きだと俺が知っているように、俺が仇波を好きだっことも本人を含めて知っているのだ。もう半ば告げているようなものだから、今更、本人を前にして好きだって言うのぐらいはどっうってことない。後は仇波が受けてくれれば良いんだけど、山巔がいるからなあ。

そんな山巔は四散した弁当をジーツと見つめて、一言。

「惜しいな。媚薬を口実に襲おうと思ったのに……

……国歌を」

「恐ろしいことをサラツと言ってんじゃねえ!!」

思わず尻を隠して後ずさる。

本当に、コイツは。コイツだけは心底から恐ろしい。

山巔峠。

コイツは　ホモなのだ。それも重度の。

はつきり言おう。コイツは、俺のケツの穴を狙っている。

「なんでだっ!?!　なんで俺なんだっ!?!　他にも男なんて一杯いるじゃん!?!」

俺よりもカツコいい奴なんて、この学校には山ほどいるじゃん!?!　なんでよりもよにもよって俺なんだよっ!?!　三年にいる噂の『主人公さん』でいいだろっ!?!」

「国歌……何度も言うようだけど、君は自分を卑下しすぎだよ。君は本当に素晴らしい。僕がこの高校に入学して最も喜ばしかったのは、君という存在に出会えた事さ。君に比べたら『主人公さん』なんてカスみたいなものだよ」

「俺の人生最大の不幸はお前と知り合ったことだよ!」

「なら私の生涯最大の怨敵は、私の山巔峠を誑かす君ヶ代くんですわね」

にこやかな笑顔でグサリと胸に突き刺さる仇波の有り難くないお言葉。

ああ 本当に、どうしてこんな事になったのだろうか。

いつから続いているのかも忘れた関係。

知らぬ間に周囲にも知れ渡り、今ではクラス内で公然の認識の下、  
とある名称が与えられている。

君ヶ代国歌。

仇波浅瀬。

山巔峠。

人は俺達を『でつど・トライアングル関係』と呼ぶ。

いつも通りの騒動を経て、俺は食後をまったりと過ごしていた。  
まだ次の授業まで時間に余裕がある。

一眠り するのは山巔が怖いので出来ないが、寝転がるくらい  
なら大丈夫だろ。

即決すると、腕を枕に蒼空を仰いだ。

「膝枕しようか？」

「黙れ」

恐ろしい事をのたまうホモを一蹴して、ふと仇波を見やる。

未だに弁当をゆっくりと食べ進めていた仇波は、どうやら俺の視線に気づいたようで小首を傾げている。どちらかという綺麗よりも可愛いと形容すべき仇波なので、その仕草に思わず見惚れてしまった。

けれど、そんな意思とは裏腹に口は滑らかに動く。

「膝枕してくれない？」

「山巔君を？」

遠回しな拒絶に俺は目蓋を閉じた。

ああ、陽が目沁みるなコンチクショウ。

胸中で静かに涙を流して、溜め息と共に眼を開ける。

視界一杯に山巔の顔が広がっていた。

「うおっ！？」

自分でも訳が分からない奇声を上げながら、思わず山巔の顎目掛けてアッパーを見舞う。けれど、咄嗟にしては結構いい角度に振り抜けそうだった拳は、容易く山巔に受け止められた。

さすが強い男を目指して格闘技に没頭していたという経歴の持ち主。

この程度の奇襲、物の数じゃないか。

「……いきなり何するんだい、国歌」

「こつちの台詞だっ！ てめえ、今一体ナニしようとしやがった！？ いや、待て。言つな。言われたら、なんかもう学校に来れなくなる気がするから」

あまりの恐怖に引き籠もってしまいそうだ。  
そんな当たり前の反応をする俺を山巔は頭を振って見咎める。

「勘違いしてるようだけど、僕はカバンを取ろうとしただけだよ？」

「カバン？」

「ほら、国歌の頭の上にあるでしょう」

言われて見やると、確かに其処には山巔の学校指定を無視したカバンがあった。

じゃあ、何か？ ただ山巔はカバンを取ろうと腕を伸ばして、偶然に顔を近づけていただけってわけか？ そういえば、確かに山巔の視線は俺を通り過ぎて頭の上の方を見ていたような気もする。

「なんだ……俺の早とちりか……悪かったな、山巔」

「まったくだよ。僕はただ、カメラで国歌の寝顔を撮ろうとしただけなのに」

「うん。やっぱりお前さ、死んだ方が良いと思うんだ」

不満げにカバンから取り出したデジタルカメラを弄ぶ山巔に、俺は笑顔で親指を地面に突き付ける。というか、その世代遅れの妙に無骨なデジタルカメラ、凄く見覚えがあるんだが。

「お前……それ、栗村のじゃないか？」

俺は、何かと俺達に縁のある小柄な一年生女生徒の姿を脳裏に思い描く。

見間違いじゃなければ、ソイツは栗村がいつも大切に持ち歩いている一品だ。

山巔は特に何の気負いも無く頷いた。

「そうだよ。少し借りたんだ」

それはちゃんと許可を取った上での事だよな。

おいおい勘弁してくれよ。栗村はともかく、そのバックにいるあの人を怒らせたらどうなるか、分かったもんじゃないぞ。下手したら聖華高校トップ20の一人が動き出しかねないって事をコイツはちゃんと理解しているのか？

追求しようか迷っていると、仇波が弁当を食い終わったらしく、「ごちそうさまでした」と行儀良く両手を合わせていた。仇波は俺達に渡した分の弁当　ちなみに散らかした山巔用の弁当は俺が責任を持って片付けた　をカバンに仕舞う。

水筒の御茶で一息入れた仇波は、改まって俺に向き直る。

「さて、仇敵の君ヶ代くん」

「何でしょうか、愛しの仇波さん」

こう言われる時は大抵、俺のガラスのように繊細なハートに修復不能の傷を入れる時だと決まっている。

それを知っているからか、山巔は目に見えて不愉快そうに仇波を睨んだ。

「ちよつと待った。何を言うつもりだい？」

仇波を睨め付ける山巔の眼光からは、下手な事を言ったら赦さないという怒気が、はつきりと読み取れた。これが別クラスの如月のように美しい友情の産物だったら素直に嬉しいけど、愛情の産物だから怖気しか走らない。

どうせ愛情を注がれるなら仇波は当然として、今井の彼女の新井さんのような美人がいい。ホント、聖華高校の三年生とは思えないぐらい常識人だし、どうやって今井はアレほどの人と付き合えたのか。今度レクチャーして欲しいくらいだ。

「安心して、山巔くん。今回は、ちよつと訊きたい事があるだけだから……そうね、山巔くんにも訊いておこうかしら」

そう言つて仇波は神妙な面持ちのまま、カバンと一緒に持つて来っていた紙袋に手を掛ける。

「……………」

何が入っているのだろうか？

内心で首を傾げた俺は、静かに紙袋から取り出されたソレが眼前に置かれるのを待った。そして、ソレを見た瞬間　確かに意識が何処かへと飛んだ。

「こ、これは……」

震える手で山巔がソレを手取る。

俺は、まだ現実に回帰できないでいた。

「学校内で出回っているらしいの。それだけじゃなくて、他にも何種類か」

仇波は顔を俯かせ、思い切り下唇を噛み締めていた。

湧き上がるのは製作者への憤怒か、それとも今まで見過ごしてきた己への叱責か。

どちらにせよ、気分の良いものではないだろう。

「……………」

胡乱な瞳で、俺は山巔が必死に捲るソレを改めて見た。

疑いようも無い。アレは。アレは。アレは

「山巔くんと、君ヶ代くんの同人誌。それも絡」

「言つなあああああー！ーっ！！」

禁断のワードを口にしようとした仇波を遮り、喉がはち切れんばかりに絶叫する。

知らない！ 俺は何も知らない！

たとえ表紙に『君ヶ代国歌×山巔峠』などと書かれていても俺は無関係だ！

きつと別人なんだ！ そう思わないとやってられない！！

危うい精神状態に晒された俺とは裏腹に、山巔は忌まわしいソレを最後まで読み終えると難しい顔で腕を組んだ。何かを悩んでいるかのような、そんな顔であった。

おもむろに、山巔は口を開く。

「一万でどうだい？」

「何がだあああああー！ーっ！？」

「当然、この同人誌を買い取る値段だよ。今後の参考にもなるしね」

「参考って何だあああああー！ーっ！？」

なんかさつきから叫んでばかりだ。

しかし、ここで意思表示しておかないと後々に大変な事になりそうなので、オーバーリアクションでも何でもしておく。

いや、八割がたは素なんだけどね。残りの二割も勢いで誤魔化したい一心だし。

「  
赦せないよね」

不意に。屋上から、あらゆる熱が消滅した。

俺は悶え苦しんでいた身体をピタッと停止させ、油の切れたブリ

キの玩具のように仇波を見る。山巔すらも、ただならぬ雰囲気に身を引き締められているようであった。

背後に隠した一品は、後で焼却処分するでしょう。

「私の山巔くんを辱めて、それを楽しんでいる人がいる。赦せるはず、無いよね」

「えっと……仇波、さん？」

思わず弱腰になってしまつぐらい、今の仇波は普段と違う。

確かに普段の仇波も普通とはちよつと違うけど、今はそれに輪をかけてオカシイ。

というか、一体なんだ、この展開は？

むしろ俺こそが仇波のポジションにいるべきではないのか？

一方的に辱められたのは俺だ。見る、山巔なんかむしろ喜んでいるじゃないか。

まず間違いなく、学校内に出回っている残りの品をも買い漁るぞ。ここは俺が狂鬼と化して製作者に正義の断罪を加えるべきだろうに、クソっ、今日ばかりは無駄に強固な自意識が憎い。俺の内心なぞ届くはずも無く、仇波は更にヒートアップ……いや、クールダウンしていく。

「赦せない。赦せない。赦せない。赦せないから」

いつの間にか、仇波の手にはキラリと光る包丁が……え？

「君ヶ代くんを殺すしかないよね」

「え？ 俺？」

「いやいや、ちょっと待とうよ。落ち着いて考えよう。」

「な・ん・で・俺？ 普通さ、そこは話の流れで製作者じゃないの？」

「あれ？ なんかおかしくない？ 本格的になんかおかしくない？  
そもそも殺人は犯罪なんだよ？ イケないことなんだよ？」

「国歌……どう考えても、今の仇波はおかしいよ」

「ああ……おかしい奴におかしいと言われるぐらいにはおかしいな」

「コイツと、仇波に関しての意見が一致するのは癪な話だけだな。  
しかし、原因がまるで分からない。いったい、仇波に何があった  
んだ。」

「山巔はチツと舌打ちすると、吐き捨てるかのように言った。」

「まさか、痺れ薬の仕返しのつもりで水筒に入れた幻覚剤が、ここ  
まで強力とはね」

「てめえが原因じゃねえかああああー！？」

「トンデモナイ告白に絶叫する俺を山巔は哀しげに見つめる。」

「国歌……いくらなんでも、四度も同じ絶叫ネタはダメだよ」

「ダメだしされた!? ってーかネタじゃねえんだよっ!!」

この状況で冷静でいられる神経の凶太さに殺意すら抱きながら、改めて仇波を見やる。言われてみれば確かに、仇波の視線は焦点が定まっておらず、右に左に揺れ動いている。これだけ隙だらけの俺に対して直ぐに襲い掛かってこないのも、距離感が掴めない為だろう。

まあ、こつちには武芸全般に精通している山巔がいる。万が一の時はコイツを盾にして優しく取り押さえてもらおう。ひとまず解決の目処が立って、俺は安堵の吐息を漏らした。そんな風にリラックスしていると、不意に山巔は言う。

「ところで、国歌。一つ疑問に思ったのだけど」

「どうせ、またくだらない事だろう。」

「いや、くだらないかどうかは兎も角さ。

なんで仇波は包丁なんて持っていたんだろうね?」

「……………」

「……………」

「……………淑女の嗜み?」

「血に塗れていそうな淑女だね」

ズバッと切り返された。

普段、ボケー辺倒な奴に突っ込まれるのはひどく腹立たしいけど、実際はそんな大した理由じゃないさ。そうさ、きつと食後にリンゴでも切るうとでも思っていたに違いない。リンゴを剥くには大きすぎる気もするけど、そこは使い慣れた物を持ってきたただけだろう。

うん！ そうに違いないさ……………たぶん。

「苦しい言い分だね」

「黙れっ！ というか今、口に出して無かったよな！？ どうして分かった!？」

山巔はニヒルに笑んで、

「愛する人の事なら、何でも分かるよ」

「オーケー。今後、俺の半径三メートル以内に近づくな」

再び親指を下に向けて宣告し、俺は山巔の背後に回り込む。

僅か数分間に精神が荒み捲くっていた俺は、腰を思い切り捻り上げ。

「さっさと責任持って止めて来い!！」

ちょうど件の本の位置に向けて回し蹴りを放った。

山巔直伝の回し蹴りは見事に背中のご真ん中に命中する。

その際、不意打ちにも関わらず、咄嗟に本を庇った山巔の心意気は心底蔑むに値する。

というか、そんなに大事なのかよ、その本。

回し蹴りの勢いに押されて仇波の前に出た山巔は、俺に文句を言おうとこつちを見る。しかし、それは山巔らしくない致命的なミスであった。

急に視界を塞ぐ何かの前に来て、仇波は反射的に動く。

「山巔っ！！」

俺が声を荒げると、仇波が包丁を突き出すのは殆ど同時だった。運の悪いことに、包丁の到達点は山巔の胸、つまりは心臓の辺り。思わず駆け出そうとしたが、とても間に合わない。

俺は最悪の結末を想像する。

けれど、それからの山巔の動きは俺の予想を超えていた。

山巔は、無理な体勢のまま突き出された包丁の持ち手を掴み上げると、腕の力だけで強引に包丁を耑り取る。そのまま明後日の方向に包丁を投げ飛ばして、今度は仇波自身を取り押さえ、組み伏せようとする。

その時、偶然にも俺は見た。

山巔の口元に浮かぶ、隠し切れない哄笑を

ハッと。山巔の目的に気づいて、戦慄する。

アイツ、この機に乗じて仇波を潰すつもりだ

！！

「ダメだっ！ 山巔！」

咄嗟に口から出た声に、けれども山巔は反応してくれた。

どうやら山巔は半ば無意識に仇波を潰そうとしていたらしい。

俺の声に正気を取り戻すと、慌てて倒れる体勢を軌道修正しに掛かる。

けど、間に合わない！

そう思った俺の予想を、またしても山巔は裏切った。

どうやったのかはよく分からないが、強引に空中で半回転して、仇波との位置を入れ替える。

ドスンッ！ という大きな音が屋上に響き渡った。

あまりにも痛ましい音に俺は慌てて二人の下まで駆け寄る。

山巔を下に。仇波を上を。

ともすれば仇波が山巔を襲っているかのようにも見える体勢のまま、二人は身動きすらせずに固まっていた。何処か怪我でもしたのか。そう思った俺は二人の全体を見渡せる位置にまで近づいて硬直した。

「あ、あ、あ……」

喉を震わせるのは、思い掛けない事態に動転して、声にもならない呻き。

それは山巔も同様らしく、唇に蓋をされた体勢のまま、瞬き一つしていない。

有り体に言えば、つまり、その……山巔と仇波は、キスをしていた。

血の気が一気に引く。

繰り返す言うようだけど、俺の好きな人は仇波だ。

それは暴言を吐かれようと、包丁を向けられようと変わらない。

分かっている。

無理に体勢を入れ替えた際に偶然、触れてしまった事ぐらい。

その証拠に山巔は驚愕の為に動こうともしない。

分かっているのだ。

分かっているが　それで納得できるなら、愛憎劇なんて言葉は存在しない。

「山巔！ てめえ、なにやって「ぐわああああーっ！」って、うお！？」

急に絶叫したかと思うと、山巔は立ち上がり、こっちに向かって仇波を放り投げてきた。危ういところで仇波をキャッチする。少々よろめくが、問題は無い。

仇波は、どうやら気を失っているらしく、今のキスについては気がついていないらしい。その事に安堵しつつ、改めて山巔を見やる。

「がああああっ！　ぐぼっ、がはっ、ぐうううううううっ！　！」

なんとというか、まるで悪魔が教会に入ったかのような苦しみようだった。

俺だったら泣いて喜ぶところだが、邪道を志す奴にとって、正道とは触れる毎に身を切るものらしい。ここまで大袈裟に苦しまれると、怒る気も失せてしまう。

「さて、と」

俺は仇波を屋上に優しく寝かせると、入念に腕を伸ばし、脚を解す。

コンディションは悪くない。

俺は中高で帰宅部ながら、陸上部のエースだった今井に追い縋れるほどの脚を持っている。これなら、長距離はともかく、中距離ぐらいなら全力で走れそうだ。

俺は、物凄く遺憾ながら山巔との付き合いは深い。

高校入学から現在まで、常に付き纏って来るからだ。

だから、次に訪れるであろう展開も、幸か不幸か読めてしまった。

「く~~~~っか~~~~」

オドロオドロしい声音で俺に呼び掛ける変態。

ゆっくりと俺の方を見る眼光は、危険という言葉に収まりそうに無かった。

残念な事に、それを表現できる言葉は俺のボキャブラリーに存在しない。

まあ、俺の身に降り掛かる危険度に例えるなら、軽く核兵器は越えている。

「穢れた…クハハッ、僕は穢れてしまったよ、国歌」

穢れたんじゃなくて、壊れたんだろ。

そうツッコミを入れようとして、壊れているのは元からだと思っ直した。

「清めなくちゃいけない……穢れた僕の唇を……」

そうかそうか。それは大変だな。

俺は上体を軽く倒して、屋上の出入り口に狙いを定める。

「国歌　君の唇で!!」

GO!!

頭の中でスタート合図を切ると、昼休みの終わりを知らせる本鈴が鳴るのは同時だった。

最早、授業なんてどうでもいい。廊下は走っちゃいけません？  
知ったことか！

今は、ただ　純潔を護り切るのが、最重要事項だ!!

「うおおおおおおおっ!!」

「待つてくれ、国歌――っ！！」

猛スピードで屋上から飛び出す羊と狼。

果たして羊は狼の魔の手から逃げられたのか　その結末は当事者しか知らない。

一人取り残された仇波は、二人が走り去った直ぐ後にヒョッコリ身を起こした。

愛しそくに自身の唇を撫で上げ、次いでクスクスと笑みを零す。

「　　こういう時は、計画通りって言うのかな？」

仇波はさも愉快そうに一頻り笑うと、山巔の絶叫を思い出してゾクゾクと光悦に震えた。その時、不意に切羽詰ったかのような叫び声が聞こえた。

仇波は屋上のフェンス越しにグラウンドの片隅を走り抜ける二人の姿を見つける。

まだ一、二分しか経っていないのに、もうあんな所まで達した二人の脚力に仇波は素直に感心した。冷えた風が胸中を通り過

ぎるのを肌で感じながら、おもむろに呟く。

「やっぱり、ヤっちゃえば良かったかな？」

何を？ とツツコムものは、残念ながらこの場にはいなかった。

度し難いコミュニケーションによる生殺入り混じる三角関係。

君ヶ代国歌。

仇波浅瀬。

山巔峠。

もう一度言おう。人は彼等を 『でっど・トライアングル関係』  
と呼ぶ。

## でっど・トライアングル関係（後書き）

コメディの連載をするのは初めてなので、これで本当に良いのか不安です。

気軽に感想・批評・評価をよろしくお願いします。  
今後の参考になりますし、何より励みになります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7289t/>

---

聖華高校？ ああ、あの変人の巣窟ね

2011年6月13日14時55分発行